

新しい本質主義と実体種

氏名：鈴木生郎

所属：日本学術振興会（千葉大学）

1970年代以降、S. クリプキや H. パトナム、D. ウィギンズらは、「個物あるいは自然種（natural kinds）は、われわれの認識や言語的实践とは独立に本質をもつ」という主張を強力に擁護した。こうした伝統的かつ優れて形而上学的な本質主義——われわれの認識および言語实践から独立した本質というアリストテレス的なアイデア——の復権は、「分析形而上学」と呼ばれる分析哲学伝統における形而上学的研究の隆盛を後押しする結果となった。そして、この本質主義は、現在に到るまで分析形而上学において有力な立場であり続けている。

しかしながら、生物学および生物学の哲学においては、事情は大きく異なっている。特に、生物種が本質をもつという主張については——クリプキやパトナムにおいては、生物種はまさに自然種の典型例とみなされていたにも関わらず——進化生物学者及び生物学者から極めて冷淡な扱いを受けてきた。その理由は、次のような点からも確認できる。例えば、クリプキは自然種に関する本質主義を擁護する際、次のような主張にコミットしているように思われる。すなわち、(1) 自然種には、その成員すべてに共有された本質が存在する、(2) その本質は、その自然種の成員がもつ内在的性質、とりわけその基底的な内部構造についての経験的探求によって明らかにされる、という二つの主張である。しかしながら、進化生物学の知見に基づくならば、生物個体のどのような内在的性質も——例えばその特定の遺伝子構造でさえも——その生物種の成員に共有される本質ではありえないのである。したがって、生物種に関する本質主義は、少なくともその標準的な特徴付けに従うならば、進化生物学の知見と衝突するように思われる。

しかし近年、生物学の哲学において、進化生物学の知見と整合的な仕方で生物種に関する本質主義を擁護する試みが見られるようになった。こうした「新しい本質主義」は、先の(1)及び(2)の主張に関して大幅な譲歩を行う。すなわち、生物種の成員全てに共有される特定の性質が存在するという主張や、生物種の性質がその成員の内在的性質によって与えられるといった主張を制限及び放棄する。しかし他方でこの新しい本質主義は、「生物種は、われわれがその成員について単なる偶然的一般化に留まらない法則的説明や予測を手に行けると言う意味で世界の中の自然なまとまりを成す」という、自然種について本質主義の中心的アイデアを保持しようとするのである。こうした試みは、自然種に関する本質主義を生物種に適用する可能性を拓くだけでなく、進化生物学の営みをどのようなものとして理解すべきかについて新たな理解を与える点で、極めて興味深い試みであると言える。

しかしここで注意が必要なのは、分析形而上学においては自然種についての本質主義だけではなく、個物についての本質主義もまた最重要トピックであり続けてきたこ

とである。そして、個物についての本質主義に関する立場として極めて有力視されてきたのが、ウィギンズを代表的な擁護者とする次の立場である。ウィギンズは、実体種 (substance sortal) という概念に基づいて、個物の本質について次の二つの主張を行う。すなわち、(a)いかなる個物も、必然的にある特定の实体種に属する、(b)その実体種は、その個体が何であることを特定すると共に、その個体の本質——それを失うならば当の個体が存在しなくなるような性質——を規定する、という二つの主張である。そして、こうした実体種の典型例としてウィギンズが挙げるのは、ヒトのような生物種である。すなわち、ウィギンズによれば、私たちはヒトという実体種に必然的に属し、当の実体種によって規定される本質をもつことになる (この立場は、人の同一性 (personal identity) についての「動物説」としても知られ、現在分析形而上学において一定の支持者をもつ有力な立場である)。

しかし、ここで問われるべき問題がある。すでに述べたように、「新しい本質主義」は、少なくとも生物種を自然種とみなす可能性を拓くように思われた。他方でこうした新しい本質主義は、生物種を実体種とみなす道をも拓くのだろうか。ウィギンズの実体種についての主張は、生物学及び生物学の哲学の知見のもとで生き延びることができるのだろうか。本発表の目的は、まさにこの点を明らかにすることにある。

以上の点を明らかにするにあたって、発表者は、新しい本質主義の多くが次の点を認めるという事実に着目する。すなわち、ある個体が生物種に属するか否かを確定するためには、その個体の内在的特徴ではなく (あるいは、内在的特徴だけではなく) 当の個体と他の個体との間の関係的性質に訴える必要があることを認める点である。そして、本発表において論じるように、このことは、生物種を実体種と見なすウィギンズの主張に大きな問題を突きつけるように思われる。本発表では、こうした問題点を検討することで生物種に属する個物はその種に本質的に属するという主張に評価を与え、さらにそうした評価から導かれる形而上学的な帰結を明確化することを目指す。